

主題「接続期の教育の充実を目指して」

～『花巻市アプローチカリキュラム』と『花巻市スタートカリキュラム』の連続性を踏まえた取組～
(3年次計画の3年次)

保幼小連携班 古川 美賀子 (やさわこども園 主幹保育教諭) 伊藤 真希子 (湯口保育園 保育士)
菊池 佳子 (湯口大谷幼稚園 教諭) 梅原 真琴 (土沢幼稚園 主査)
浅沼 昌子 (湯口小学校 教諭) 舘澤 由香里 (矢沢小学校 教諭)

1 主題設定の理由

保幼小連携班では、平成26年度、スタートカリキュラムを見通した『花巻市アプローチカリキュラム』を作成し、就学前教育の充実を目指した具体的実践を検証・改善していく取組を促した。また、27年度には、幼児期からの発達特性、その子の育ちを大事にし、豊かな体験を重視する等、総合的に学ぶ幼児期の教育の方法も取り入れながら、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくための『花巻市スタートカリキュラム』を作成し、「学びの芽生え」の時期から「自覚的な学び」の時期への円滑な移行を図っていく取組を促した。

そこで、28年度から3年次計画として、実践事例を基に『花巻市アプローチカリキュラム』と『花巻市スタートカリキュラム』の円滑な接続の必要性と有効性を検証することで、各施設での保育・教育の充実と質の向上を図ることができると考え、本主題を設定した。

2 研究計画

- (1) 『花巻市アプローチカリキュラム』と『花巻市スタートカリキュラム』の実践
- (2) 『花巻市アプローチカリキュラム』と『花巻市スタートカリキュラム』の必要性と有効性の検証

3 研究内容

- (1) 各施設による『花巻市アプローチカリキュラム』と『花巻市スタートカリキュラム』の実践とまとめ
- (2) 実践事例の検証
- (3) 両カリキュラムの必要性と有効性の検証
- (4) 保幼小連携研究員の連携実践と発表

4 検証

- ・両カリキュラムに示されてある子どもの姿を基に参観や意見交換を行い、接続期にある子どもの姿を具体的に捉えることは、子どもの学びの方向性を確認する上で重要であった。
- ・子どもの主体性を引出し、子どもたちが自信や意欲を持って自己発揮できるようにするためには、教師の意図的な活動・発問の設定が不可欠であった。スタートカリキュラムの意図をよく理解し、接続期の子どもにあった活動と指導になるよう改善を重ねていくことで両カリキュラムの有効性がより発揮される。
- ・両カリキュラムを各施設の教育課程等に位置付け、各施設全体で共有し、互恵性のある連携・交流していくことが、子どもの学びと育ちをつなぎ、保育・教育の一層の充実につながる。

5 成果

- ・スタートカリキュラムの第1・2週目を参観し、幼児期に培った力を発揮しながら、新しい環境で自分たちの生活を築いていこうとする子どもたちの姿から、両カリキュラムの有効性と必要性を確認することができた。
- ・ニコニコ先生体験(保育士体験)をとおり、アプローチカリキュラムにある子どもの姿を具体的に捉えることができ、スタートカリキュラムの改善につなげることができた。
- ・地域の実態に即した保幼小連携の取り組みを教育課程に位置付けることで、無理なく、継続・発展させ、連携の強化が図られていることを確認することができた。

6 課題

- ・子どもの育ちと学びをつなぐためには、幼児教育と小学校教育の相互理解が不可欠である。相互理解を深めるためにも、アプローチ・スタート両カリキュラムを手掛かりに、子供を中心に置いた連携・交流を意図的に行っていくこと。
- ・今年度の実践を踏まえて、さらに各校のねらいを明確にし、適応指導ではなく、子どもたちの主体性を引き出すスタートカリキュラムを作り上げていくことが必要である。
- ・接続期にある子どもたちの育ちと学びを確実につなぐためには、各施設で教育課程等に両プログラムをしつかりと位置付けるとともに、全職員で共通理解を図っていく必要がある。

【参考文献】

- ・保育所保育指針解説 2018年3月23日 厚生労働省編 株式会社フレーベル館
- ・幼稚園教育要領解説 平成30年3月23日 著作権保有 文部科学省 株式会社フレーベル館
- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
平成30年3月29日 著作権保有 内閣府・文部科学省・厚生労働省 株式会社フレーベル館
- ・スタートカリキュラム スタートセット 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 平成27年1月
- ・発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き
文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 編著 平成30年3月 (学事出版株式会社)